

華岡青洲と父直道の瘍科の師・ 岩永一族の謎に迫る

今井 秀

今井整形外科

受付：令和3年11月21日／受理：令和4年7月11日

要旨：華岡青洲は京都の岩永氏に、青洲の父直道は大坂の岩永蕃玄に瘍科を学んだと云われる。蕃玄と弟の玄昌は江戸中期とともに長崎から来阪した。この浪華の岩永一族と血族である京都の岩永氏は江戸時代に蘭方を加味した瘍科医として活躍したが、意外にも知る人は少ない。今回浪華の蕃玄・玄昌両家の過去帳を調査して系譜を作成し、二世蕃玄が青洲の父直道の師であることを確認した。また玄昌三男隆恭の『阿蘭陀流系譜』から、一族は出島蘭館医ダニエル伝来の榎林流阿蘭陀外科医と判明した。一方青洲の師である京都の岩永氏は当時京で名を馳せた外科医の岩永左門・貞吉親子と推理したが、解明には至らなかった。また岩永一族の先祖は、長崎在住で向井元升に学んだ岩永宗故と思われた。

キーワード：華岡青洲，岩永蕃玄，岩永玄昌，岩永宗故，阿蘭陀外科

1. はじめに

華岡青洲（1760-835）の研究に関しては、1923年に呉秀三が著した権威ある書『華岡青洲先生及其外科』¹⁾と1971年にその覆刻版の附録を書いた宗田一²⁾をはじめとする膨大な研究が長年にわたり蓄積されている。特に松木明知は1989年頃より青洲の研究を始め、1997年から精力的に夥しい数の報告を行い、成果をあげている。

松木は1999年の論文「中川修亭の「麻薬考」の書誌学的研究—四種の写本の検討—」³⁾の冒頭で“華岡青洲の最大の業績は麻沸散，一名通仙散の開発であり，それを用いて全身麻酔下に乳腺腫瘍切除を含む各種の手術を施行したことである。麻沸散開発の経緯に関しては，これまで多くの人たちによって研究されてきたが，依然として謎の部分が多い。宗田一はその所蔵する中川修亭の『麻薬考』（以下宗田本）の写本が青洲の麻沸散開発の歴史を知る上で極めて重要な史料であり，文政九（1826）年に刊行された岩田三谷の『外療秘薬考

一名麻薬考』は，中川修亭の『麻薬考』の剽竊本であることを明らかにした⁴⁾”とし，また自著の『華岡青洲研究の新展開』⁵⁾には“未だ多くの謎が不詳として残されていることも現実で，その未解決の問題の一つが華岡直道の師岩永氏と青洲の外科の師岩永氏についてである”と述べている。

今回，筆者は麻沸散開発の経緯について詳説した難解で謎を解く鍵を握ると思われる書である『麻薬考』を読み解き，青洲と父・直道の瘍科の師とされる岩永一族についてこれまで明らかでなかった部分を究明すべく調査を行った。その結果得られた新たな知見に若干の考察を加え私論を述べる。

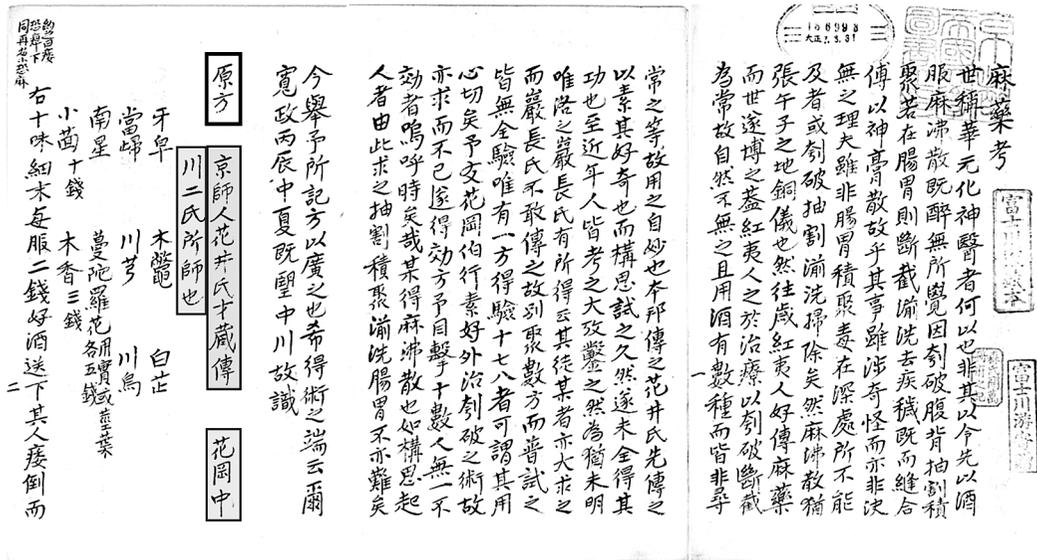
2. 青洲の京都修業時代

『華岡先生畧傳』⁶⁾に青洲は「歳廿三，初テ京師ニ遊ブ。桃谷華洲⁷⁾，山田静齋⁷⁾，鈴木蘭園⁸⁾，朝倉荊山⁹⁾，諸子ヲ師友トシテ閩洛ノ道¹⁰⁾ヲ問フ。又吉益南涯¹¹⁾ニ從ツテ氣血水ヲ講スルコト三月，後遂ニ大和見水先生¹²⁾ヲ師トシテ外治ヲ学ブコト一

年。其他諸名公ニ周旋シテ、常ノ師有ルコト無シ。精攻習復、又勤メタリ」(読み下しは筆者)と記される。

ところが京大富士川文庫の『麻薬考』¹³⁾(以下富士川本)の「原方」には「京師人花井氏才蔵傳花岡中川二氏ノ師トスル所ナリ」(図1)、また「岩

切曰中神氏用此方」に「其ノ最功者ハ岩長是レ即チ花岡氏ノ師ナリ」(図2)と、中川修亭(1771-1850)¹⁴⁾は花井氏(花井仙蔵¹⁵⁾)が花岡氏(華岡青洲)と自身の師で、また岩永(長)氏は青洲の師であると述べている。したがって、当時京都で青洲が修亭と出会い医事を談じる親しい間柄で



京都大学附属図書館富士川文庫 所蔵

図1 『麻薬考』中川修亭の序と「原方」

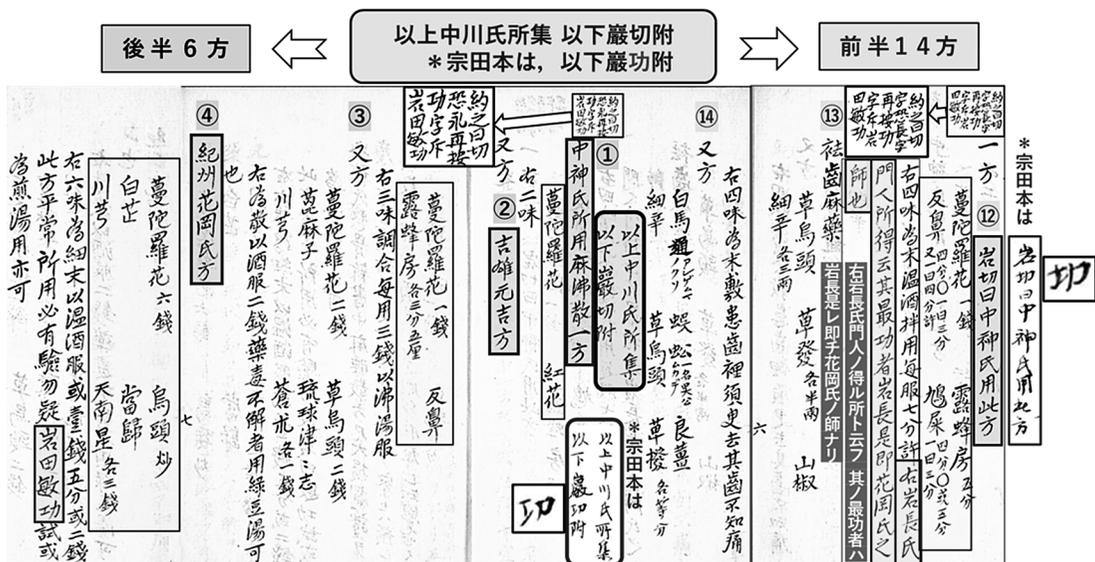


図2 富士川本『麻薬考』

あったことや、花井仙蔵や岩永氏を師として学んだことは、『華岡先生畧傳』には書かれていないのである。

3. 富士川本『麻薬考』について

寛政丙辰^{ひのえたつ} (1796) 年に中川故 (修亭) が序^{しる}を書いた富士川本『麻薬考』は、以前森約之 (1835–1871)¹⁶⁾ が購入した『麻薬考』の写本である。約之は巻末の跋文に“嘗て『麻薬考』を購入しごく僅かの間所有し見ていた。その真本を多くの友人に貸し出したが昨年 (1866年) 十二月廿九日の火災で失った。以前に貸していた前田安貞が写本を作っていたので、それを借りて自らの手で謄写した。この書は甚だ珍しい善本なので、^{みる} 看る者は皆感嘆する。慶応丁卯 (1867年) 三月廿二日森約之・養真識す” (句読点、読み下しと要約は筆者) とその顛末を述べている。

富士川本『麻薬考』には20処方^(マツ)の麻薬が記載されている。本文半ばに「以上中川氏所集。以下巖切附」(図2)と書かれ、松木は“富士川本と宗田本の『麻薬考』は修亭の収集した処方14方を取めた前半と岩田敏功が収集した6方を取めた後半からなる”¹⁷⁾としている。さらに、“富士川本には「以上中川氏所集。以下巖切附」、宗田本には「以上中川氏所集。以下巖切(功)附」があるが、この記述は武田本、松木本になく、この記述のみによっても富士川本と宗田本が同じ系統に属し、武田本、松木本は別の系統に属することが言えると思う”と述べている。ちなみに宗田本は「以下巖功附」と判読でき、また松木も「(第三表)各写本の処方^(マツ)の比較(二)」には「以下巖功附」と記載している¹⁸⁾ (図2)。

4. 『麻薬考』に登場する岩田敏功とは？

富士川本『麻薬考』本文半ばにある「以上中川氏所集。以下巖切(宗田本は巖功)附」箇所の頭注に、「約之曰切恐永再按功字斥岩田敏功」すなわち“約之曰ク。切ハ恐ラク永、再ビ按ズルニ功ノ字ハ岩田敏功ヲ斥ス” (図2) と森約之の書入れがあり、約之は(当初)巖切が恐らく岩永だろうと考えたが、再び按じると巖功は岩田敏功を指すと

している。

これは「切」と「功」の字は酷似しているので、(巖切と誤って写したのは前田安貞かもしれないが) いずれにしても富士川本は約之が巖切と謄写したものである。以前約之は『麻薬考』の真本を所有し見ていたので、記憶をたどり再び按じて巖功であったことを思い出し、“功”の字は岩田敏功を指す”と敢えて頭注に書き入れたのだろうと筆者は推測した。

また、前半12方目の「岩切(功)曰中神氏用此方」は中川修亭が書いたものであるが、その箇所の頭注には「約之曰切字恐長字再按功字斥岩田敏功」すなわち“約之曰ク。切ノ字ハ恐ラク長ノ字、再ビ按ズルニ功ノ字ハ岩田敏功ヲ斥ス”と書入れがあり、ここでも紀之は岩切が恐らく岩長だろうと考えたが、再び按じると「功」の字は岩田敏功を指すとしている。修亭は岩切(功)には「氏」をつけずに呼び捨て、中神琴溪には中神氏と敬称の「氏」を用い、その解説文には「右岩長氏門人所得云……」と、また序では「唯洛之巖長氏有所得云……」といずれも岩長(巖長)に「氏」を用いていることから、筆者も岩切(功)と岩長氏は別人であると考えた。

さらに、後半4方目の「紀州花岡氏方」は巖切(功)が書いたものであるが、その解説文は「右六味ヲ細末ト為シ、温酒ヲ以テ服ス。或ハ壹錢五分或ハ二錢。此ノ方平常用ユル所必ズ驗アリ、疑フコト勿レ。岩田敏功試シ或ハ煎湯ト為シ用ユルト亦可」(図3)とあり、この岩田敏功にも敬称がないことから、筆者は岩田敏功が巖切(岩功)本人ではないかと疑いを抱いた。

5. 『外療秘薬考 一名麻薬考』を著した岩田三谷について

それでは、岩田敏功とは一体いかなる人物なのだろうか。筆者は、この岩田敏功は青洲と同郷で文政9(1826)年に『外療秘薬考 一名麻薬考』を著した岩田三谷¹⁹⁾ではないかと推理した。

なぜなら三谷の門人土佐の岡本祐貞は『外療秘薬考』の序に、“三谷は金蘭の友である青洲に麻沸散の処方を尋ねたが断られ、その後発奮精思して

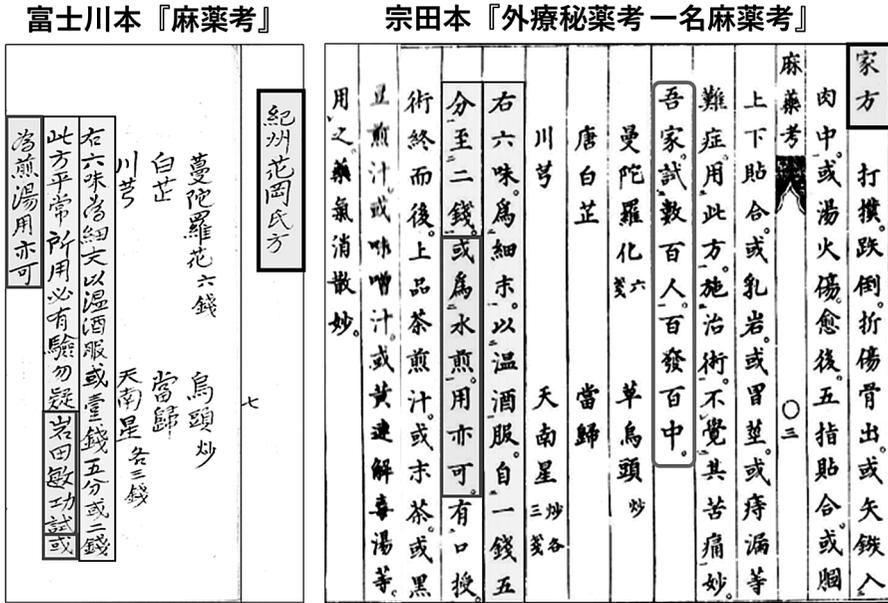


図3 三谷の「家方」と青洲の「紀州花岡氏方」

あらゆる医籍を渉猟し麻酔薬を開発した”と語っているが、三谷の「家方」は青洲の麻沸散と全く同じ生薬組成で、さらに服用法も温酒に溶き服用するか“或ハ水煎ト為シ用ユルコト亦可”（図3）と「紀州花岡氏方」の“岩田敏功試シ或ハ煎湯ト為シ用ユルコト亦可”と全く同じことが書かれていることから、筆者は岩田敏功が岩田敏功で『外療秘薬考一名麻薬考』を著した岩田三谷本人であると結論づけた。したがって『麻薬考』の後半6方を書き足したのは、岩田三谷ということになる。

また文政7（1824）年に三谷の門人出雲の安立修三が著した『外療秘薬考』の跋には、「三谷先生曰、醫之為道也、無秘焉。凡外治之要、有^レ四、曰腐葉、曰火艾、曰麻薬、曰利刀。能運^レ用之於活物^ニ、則醫道盡矣。（中略）木國、花岡氏、以^レ麻薬一方、鳴^レ于天下、世醫未^レ識^レ其方^ヲ、如^レ先生^ノ、不^レ敢以秘^レ之、大董可^レ知也、以為^レ跋」とある。すなわち青洲は麻薬一方（麻沸散）で天下に名を轟かしたが、その製法を秘伝としたため世間の医者は未だこれを識らない。師の三谷が敢えてこれを秘とせず公開したことは称賛すべきであると述べている。

しかし、三谷が『麻薬考』を盗用し青洲秘伝の

麻沸散を「家方」として載せ、その効果を“吾家、数百人ニ試ス。百発百中”（図3）とあたかも自分の手柄のように豪語し、『外療秘薬考』を出版したことは、筆者は宗田一が剽窃本と揶揄したのと同様に卑劣の誹りを免れないと考える。

岩田三谷（生没年不詳）は本姓大江。名は広彦。通称が一二三で三谷は号である。しかし、敏功とする書は見当たらない。青洲と同じく紀州の人で、吉益南涯に医を学び、大坂で開業。内科・外科を修めた。文化末～文政初（1818年頃）の「大坂御醫師處便覧」（大坂医師番付集成^図）²⁰に、三谷は島ノ内「古方家」の中川周貞とともにウツボ「日本流」岩田一二三として役職の「行司」に名が挙がる。文政8（1825）年に南涯の著『医範』を校正し、翌年『外療秘薬考一名麻薬考』を出版している。ちなみに三谷と修亭（1771-1850）はともに南涯の高弟で、恐らく同世代で旧知の間柄であったと思われる。それゆえに、修亭が岩功と呼び捨てにするのも頷ける。

6. 麻沸散開発の歴史について

修亭は富士川本『麻薬考』序（図1）の冒頭に中国後漢の神医華佗²¹が麻沸散を用いて開腹手

術を行ったことを述べ、次に「然レドモ往歳^{おうさい}（往年）紅夷人^{こういじん}好^こンデ（始メテ²²）麻薬ヲ世ニ伝ヘ遂ニ之ヲ博ム。蓋シ紅夷人ノ治療ニ於テ剝破断截（断切）ヲ以テ常ト為ス。（中略）故ニ之ヲ用ユルコト自ズト巧ナリ。本邦之ヲ傳フルハ花井氏先ズ之ヲ傳フ。素ヨリ其ノ好奇ヲ以テナリ。構思シテ之ヲ試スコト久シ。然レドモ未ダ全ク其ノ功ヲ得ザルナリ。近年ニ至リ人皆之ヲ考ヘ大イニ之ヲ攻鑿^{こうさく}（攻略）ス。然レドモ猶未ダ明カナラズ。唯洛ノ巖長氏得ル所有リト云フ。其ノ徒某ハ亦大イニ之ヲ求ム。巖長氏敢テ之ヲ傳ヘズ。故ニ別ニ数方ヲ聚メ普ク之ヲ試ス。皆全ク驗無シ。唯驗ヲ得ル一方有リ」（原漢文、句読点、読み下しは筆者）と記している。

すなわち花井氏は昔から紅毛人が麻薬を用い外科手術を行っていることを我が国に初めて伝えた。皆夫々に工夫して麻薬を創り試したが全く効かなかった。しかし京洛の岩永氏が得る所があって効果のある一方を見つけたと修亭は語っている。

さらに「予ガ友花岡伯行ハ素ヨリ外治剝破ノ術ヲ好ム。故ニ亦求メテ已マズ。遂ニ効方ヲ得ル。予目撃スルコト十数人。一トシテ効カザル者無シ。嗚呼時カナ。其ノ麻沸散ヲ得ルナリ」と、修亭は友人の青洲が麻沸散を試して十数人に外科手術をするのを目撃したが、一例として効かなかったものはなかったと述べている。

修亭が“洛ノ巖長氏。唯驗ヲ得ル一方有リ”と語ったのは、恐らく『麻薬考』（図2）前半12方目の“右岩長氏門人ノ得ル所ト云フ。其ノ最功者ハ岩長。是レ即チ花岡氏ノ師ナリ”と解説した「岩切曰中神氏用此方」の曼陀羅花と露蜂房、反鼻、鳩屎に近似した一方と思われた。

さらに後半1方目に「中神氏所用麻沸散一方」が、2方目に「又方」の曼陀羅花、反鼻、露蜂房からなる吉雄元吉²³の一方が収載されている。

また京大富士川文庫の華岡青洲著『春林軒禁方録』²⁴（図4）（内容は『統禁方録』とされる²⁵）巻之七の「麻薬」の条では、最初に曼陀羅花、反鼻、鳩屎からなるオランダ系統の麻薬「美爾煎」²⁶が紹介され、その後「美爾煎」に露蜂房を加えた

「麻薬」が載る。これは『麻薬考』前半12方目に収載される“其ノ最功者ハ岩長”と解説された「岩切曰中神氏用此方」の一方である。さらにその「又方」は曼陀羅花、反鼻、露蜂房からなる『麻薬考』後半2方目の「吉雄元吉方」で、最後に「美爾煎」から反鼻を去った曼陀羅花と鳩屎二味の「岩永麻沸湯」が載る。したがって『麻薬考』の20方には収載されなかったが、修亭が序で「洛ノ巖永氏。唯驗ヲ得ル一方有リ」と語った岩永氏の麻沸湯は実在していたのである。

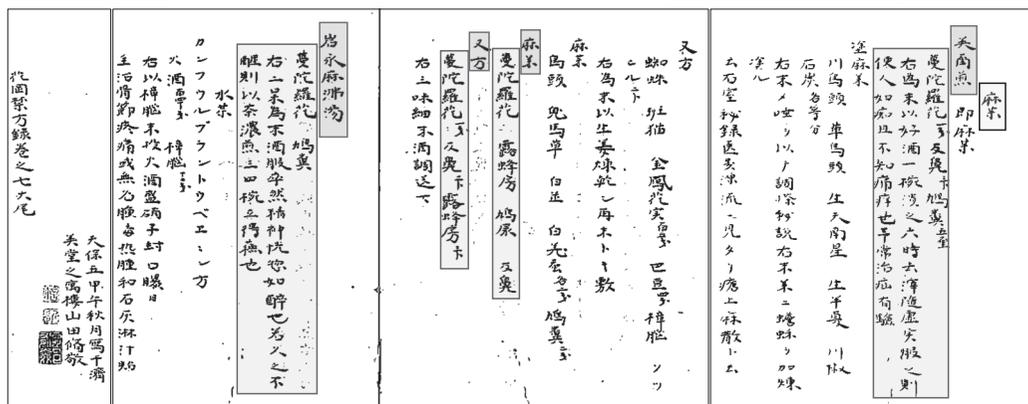
7. 青洲の外科手術について

修亭は『女科全蹄』²⁷上巻の「乳病治法」の条で“乳岩ハ古来其ノ治ヲ難ニシテ全治ヲ聞クコト稀ナリ。（中略）近來独嘯庵ノ説ヲ岩塊ヲ割去シテ金創法ヲ以テ治スルト紅毛ノ法ノ如ク云ヒタルヲ以テ、岩永氏其ノ治法ヲ試ミタレドモ、一旦治ヲ得テモ後終ニ生ヲ全ウセザル故ニヤ、一二人ヲ試テ後ハ施サズト其ノ門人語レリ。花岡伯行^{ママ}ニ（ハ）岩永氏ニ瘍科ヲ学ベリ。故ニ其ノ事ヲ聞キタルニヤ、数百人ヲ療スルニ生ヲ得ル者甚ダ稀ナリト云ヘリ”と記している。

すなわち岩永氏は永富独嘯庵が『漫遊雜記』²⁸で述べた乳癌の別出術を試みたものの、“一旦治ったようでも天寿を全うできなかったので、一・二人に試みて止めた”とその門人は語ったが、ここでも修亭は“華岡青洲は岩永氏に瘍科を学んだ”としており、続けて“青洲もそのことを聞いて数百人を治療したが、助かった者は極めて稀であった”と付け加えている。

呉秀三は『華岡青洲先生及其外科』「青洲先生の外科的系統」の条²⁹で“翻^{ひるがえ}テ先生ノ外科的傳統ヲ按ズルニ。從來ノ史家ニヨルニ先生ノ父君ガ如何ナリシカ、又（先生ハ京都ニ在リシトキ外科學ヲ大和見水ヨリ受ケタルト云フノミニテ）見水ガ如何ナル學者ニシテ何人ノ門人ナルカ、何レモ皆全ク詳カナラザリシガ。余ガ多年盡心ノ結果、先生ノ父君ハ大阪ニテ有名ナリシ南蠻流外科醫岩永蕃玄ノ門ヨリ出デラレルヲ知リテ、先生ガ京都留學前既ニ和蘭外科ニ多少ノ素養アルコト明ラカトナリ。又余ガ百方尋求ノ後、大和氏ノ子孫ヲ尋

麻薬	生薬配合				名称	『麻薬考』
「美爾煎」 <small>ビリセン</small>	曼陀羅花 _{一銭}	反鼻 _{三銭}	一一	鳩糞 _{五厘}	オランダ系統麻薬	一一
「麻薬」	曼陀羅花	反鼻	露蜂房	鳩糞	「岩切日中神氏 用此方」	前半12方目
「又方」	曼陀羅花 _{一銭}	反鼻 _{二銭}	露蜂房 _{三銭}	一一	「吉雄元吉方」	後半2方目
「岩永麻沸湯」	曼陀羅花	一一	一一	鳩糞	「洛之巖長氏. 唯一方得驗」	序文



京都大学附属図書館 富士川文庫

図4 『春林軒禁方録』(1834年写)巻之七「麻薬」と富士川本『麻薬考』との対比

ネ當テ、之ニヨリテ初メテ先生ノ師事セシハ見水ノ子タル見立ニシテ、見水ハ伊良子道牛ノ門人ナルコトヲ知り、之ヲ階梯トシテ又道牛ガ長崎ニアリテ和蘭人ヨリ外科術ヲ学ベルヲ知り、更ニ道牛ノ孫光顯³⁰⁾ノ著書『外科訓蒙圖彙』³¹⁾ニ「吾祖父直ニ紅毛人カスハルナル者ヨリ所授」トアルニヨリテ此和蘭人ガカスパル³²⁾ナルコトヲ知り、是ニ初メテ先生ガカスパル流ノ外科医ナルコトヲ知り得タリ」と、青洲の父直道は大阪の南蛮流外科医である岩永蕃玄に学んだことを記している。

この典拠は恐らく宇津木昆台の『日本医譜』で、「岩永蕃玄」の条³³⁾に“名正徳。字蕃玄。浪華人。以外科医名高于一世。華岡青洲父瑞賢師事之。以成其業。藤木直隅亦師事之。享保中人。京師岩永氏同族也”と記されることによると思われた。

8. 浪華の岩永蕃玄家について

1) 岩永蕃玄(1673-1729)

蕃玄家の菩提寺・浄光寺の過去簿(図5, 図6)に、盤玄の法名は「宗善」で、享保十四(1729)

年七月廿一日五十七歳没と記される。

前述の『日本医譜』のほかに、中野操は「蕃玄は肥前長崎の人で、正徳年間(1711-16)に浪華に來り江戸堀南側の犬齋橋西に入りたる地に居を構え、南蛮流の外科医として、正徳・享保年間にその刀圭の冴えで名声を博した人である。享保14年7月20日没し、斎藤町(江戸堀上二丁目)の浄光寺に葬ったと伝えるが、墓石は現在失われて見当たらない」³⁴⁾と述べている。

2) 岩永壽跡(1701-1749)

その後の調査で松木明知は浄光寺が区画整理のため吹田市寿町に移転したことを突き止め、過去簿の調査で二世盤玄壽跡が青洲父直道の師であることを明らかにした³⁵⁾。浄光寺過去簿には二世盤玄壽跡の法名は「宗壽」で、四十九才、寛延二(1749)年四月十八日(没)と記され(図6)、青洲父直道(1722-1785)の瘍科の師は、松木の報告通り二世盤玄壽跡であることを再確認した。

ところが、寛政末(1800年頃)の「大坂医師番



図5 浄光寺「過去簿」老～六
萬治三（1660）年～明治十七（1884）年

*** 青洲の父直道（1722-1785）の瘍科の師は二世蕃玄壽跡である**

三世盤玄氏弟

(1733-1751)

二世盤玄壽跡

(1701-1749)

初代盤玄

(1673-1729)

<p>宝曆元（一七五二）年十二月廿七日</p> <p>「宗元」 岩永氏弟三世盤元 童名伊津郎 十九才</p>	<p>寛延二（一七四九）年四月十八日</p> <p>「宗善」 岩永壽跡 四十九才</p>	<p>享保十四（一七二九）年七月廿一日</p> <p>「宗善」 岩永磐玄 五十七才</p>
<p>妙意 上田寺 妙教 口久 妙閑 口久 妙信 口久 宗元 口久 玄夜 口久</p>	<p>智圓 口久 了香 口久 妙真 口久 妙善 口久 妙可 口久 教誓 口久 宗齋 口久</p>	<p>妙正 口久 妙貞 口久 妙閑 口久 善四 口久 教信 口久 宗善 口久</p>

図6 浄光寺「過去簿」初代～三世盤玄

付」³⁶⁾ (図7) に玄昌家の岩永文恭とともに岩永蕃玄の名が挙がる。また『日本医譜』「岩永蕃玄」の条に「藤木直隅亦之ニ師事ス」とあり、藤木直隅(1779-1845)は『日本医譜』「藤木直隅」の条³⁷⁾に“名直隅，字古愚，号道洋，通称内膳亮加茂祀官，陸奥守弘直孫也。世ニ医ヲ以テ職ヲ兼ル為リ。直隅少シテ父ヲ喪フ。医ヲ後藤栗庵ニ学ビ，儒ヲ

佐野山陰ニ受ク。年廿一（1800年頃）外科ヲ志シ浪華ニ往キ瘍科ヲ岩永蕃玄ニ受ク。居ルコト二年許，其ノ精奥ヲ得頗ル奇術ヲ出ス。師甚ダ之ヲ賞シ，将ニ以テ嗣ト為サントス。故有リ辞ス。又博ク諸科ヲ学ブ。某氏ニ就イテ鍼術ヲ得ル。年廿五京ニ歸リ業ヲ啓ク”（原漢文。句読点，読み下しは筆者）と記される。したがって，1800年頃に蕃玄の



図8 「岩永玄昌夫妻墓」と「過去帳」

日に三男の輝房（隆恭）が墓を建立したことがわかった。

2) 岩永昌因（1728-1775）

宮武外骨著『浪華名家墓所記』³⁹⁾に、昌因は「玄昌の次男で、初め葛野意庵法眼の養子となる。後に離縁し岩永姓に復し、針術医を以て京極宮の侍医となる。法名玄祐居士」と記される。昌因は安永四（1775）年7月9日に48歳で没し、法雲寺に葬られた。

3) 岩永隆恭（1733-1812）

『浪華名家墓所記』に隆恭は「玄昌の三男にして道房と称す。父の死跡を継ぎ外科医を業とし、瓦町一丁目に住す。蘭方の名医野口道悦（友山）の門人なり」と記される。法名は「獲隆院大源道房居士」で、文化九（1812）年四月廿六日に没した。これまで所在が不明であった隆恭夫妻の墓（図9）は掃苔仲間の濱口昭宏氏の協力を得て無縁墓域の玄昌夫妻の墓の隣に発見できた。前面に法名が刻まれ、右側面に「享保十八癸丑（1733）年八月二十六日生、文化九壬申（1812）年四月廿六日没」と生没年月日が刻まれるも碑文はなかった。したがって隆恭がまだ満1歳にも満たない享保十九甲

寅（1734）年八月六日に父・玄昌は没していることが分かった。

これまで隆恭（輝房・得龍子・道房）の事績は不詳であったが、隆恭の著書『阿蘭陀流系譜』⁴⁰⁾が慶応富士川文庫にあり、この書から隆恭はダニエル・ブッシュ（Daniel Busch）⁴¹⁾伝来の榎林栄休（鎮山）を祖とする「榎流外科」の流れを汲む八尾の野口友山に師事した医家であることが分かった。

隆恭は栄休について「肥前長崎ノ産。氏ハ榎林。字ハ新五兵衛。致仕ノ後栄休ト改ム。世々阿蘭陀大譯詞ナリ。性質瘍科ノ術ヲ好ム。タ子エル長崎在留ノ間日々新炙（親炙）シテ交ワリ、甚厚クタ子エル術ヲ学ビ蘊奥ヲ究ム。（中略）長崎開発以来ノ名医ナリ。二男一女ヲ生ム。医術ハ末子栄哲ニ傳フ」と述べ、その末子栄哲は「長崎ノ産ナリ。始メ他家ヲ継グ。後本氏ニ皈ル。父ニ随ッテ瘍医ノ道ヲ学ビタ子エルノ術ヲ明ラム。医ヲ以テ業トシ榎一流ノ医術ヲ興ス。（中略）其ノ妙父ニ劣ラズ。門人甚ダ多シ。蓋シタ子エル入朝以前年々入船ノ阿蘭陀医ニ随テ学ビ得タル外科法ヲ都テ古流トシ（寺田流、西流、カスハル流、アルマンズ流等也）、タ子エル伝来ノ榎流ヲ阿蘭陀新流トス。古流ニクラブレバ精密ナルコト甚ダ過タリ」と、ダニエル伝来の榎流を阿蘭陀新流と定義している。



図9 「岩永隆恭夫妻墓」と「過去帳」

さらに門人の野口友山は「筑前国福岡ノ産。姓ハ藤原、氏ハ高津。(中略)若年ノ比長崎ニ遊キ樋口善太郎養子ト成リ太右衛門ト云フ。性質精辨ニシテ甚ダ外科ノ術ヲ好ミ、榮休ノ外嬭宮氏ト友トシ善シ。常ニ勤務ノ餘リタ子エルノ医術ヲ学ビ、病症ヲ論シ法ヲ辨シ、略蘊奥ヲ懷ス。一日宮氏ノ曰ク、兄外科ノ術ヲ好ムコト甚ダ密ナリ。然レドモ甲医ヲ業トセザレバ治ヲ施シ試ムルコト少シ。人病百端(様々)、直ニ証ヲ問ヒ方ヲ処シ機ニ臨ミ変ニ応ズルコト、榮哲ニ若カズ。乞フ榮哲ノ門ニ入り其ノ道ヲ究メンコトヲト。師諾シテ退ク。依テ榮哲ニ行キ師弟ノ盟誓ヲ為シ道ヲ修練ス。後故有テ長崎ヲ去リ河内国若江郡八尾村ニ移住ス。母氏ヲ冒シテ野口氏友山ト云フ。学ビ得タル所ノ医術ヲ以テ、貧人ノ病苦ヲ救ヒ沈痼ヲ癒シ藥劑ヲ施賜ス。或ハ同志ト共ニ名境勝地ヲ経歴シ連歌ヲ楽ム。世ニ交ワル性ノマヽニス。常ニ門子ト医術ヲ講ス。和河撰ノ問業ヲ受ル者多シ」と語り、岩永家の阿蘭陀外科は、近代外科学の父アンブロワーズ・パレ⇒出島蘭館医ダニエル・ブッシュ⇒植林榮休(鎮山)⇒榮休末子・榮哲⇒野口友山⇒隆恭⇒榮安、文恭の流れを汲むとしている。

その後ダニエル伝来の植林流阿蘭陀外科を学んだ隆恭は、『阿蘭陀新伝植林先生正流外科法』八巻⁴²⁾を著している。

4) 岩永榮安(1763-1796)

『浪華名家墓所記』に榮安は「隆恭の長男にして、定房と称す。家跡を継ぎ同じく外科医を業とす。子なきを以て弟文恭に家を譲る」と記される。法名は「法林院戒雲源定居士」で、寛政八(1796)年四月十四日に34歳で没し、法雲寺に葬られた(図10)。

5) 岩永文恭(1774-1821)

『大阪人物誌』に、岩永文恭は「岩永氏。名は時房。通称文恭。浪華の人。岩永隆恭の第二子なり。夙に家学を父に受け、医を以て日光准后京都御隠殿に仕ふ。兄榮安嗣子なきを以て致仕して大阪に帰り、榮安の猶子となりて家跡を嗣ぎ、業を南本町の邸に開く。特に外科の医術に長じ、当時巨擘を以て斯界に推重せらる。其の名海内に遍く。遠く来りて業を門下に受くる者実に二百餘名の多きに及ぶと云ふ⁴³⁾と記される。当時大阪では青洲末弟の華岡鹿城(1779-1827)⁴⁴⁾が文化13



図10 玄昌家三代～六代の「過去帳」と「岩永文楨の墓」

(1816)年に中之島山崎の鼻で「春林軒」の分塾である「合水堂」を開き、「華岡流外科」を教授していた。文恭は鹿城とともに「大阪外科医の双壁」と称された。法名は「青雲院閑山時房居士」で、文政四(1821)年十月十日に48歳で没し、法雲寺に葬られた(図10)。

6) 岩永文楨(1802-1866)

文楨の法名は「養徳院^{ゆきふさかくさい}之房藿齋居士」。慶應二(1866)年六月十五日に「自稱六十九歳」で没し、当時としては珍しく「寺内土葬」された(図10)と法雲寺の過去帳に記され、墓碑は現在法雲寺境内の「岩永」と刻まれた台石上にあり、前面に法名が、左側面には卒年月日が刻まれている(図10)。

『大阪人物誌』には「岩永氏。名は之房。通称文楨。別に藿齋或は鐘奇齋と號す。京都の人なり。浪華の医家岩永文恭の女婿となり、業を道修町心齋橋筋東に開く。業務の旁ら本草学を京都山本亡羊の門に受けて、能く其の蘊蓄を究め、深く造詣する所あり。嘗て同志の者と相謀り集芳社を結び、毎年物産会を開催し、以て大いに斯道^{ひえき}の裨益を図る。又好て人形を愛し、時に和漢の人形会を催ふして楽みとなす。性学を嗜みて文才あり。自

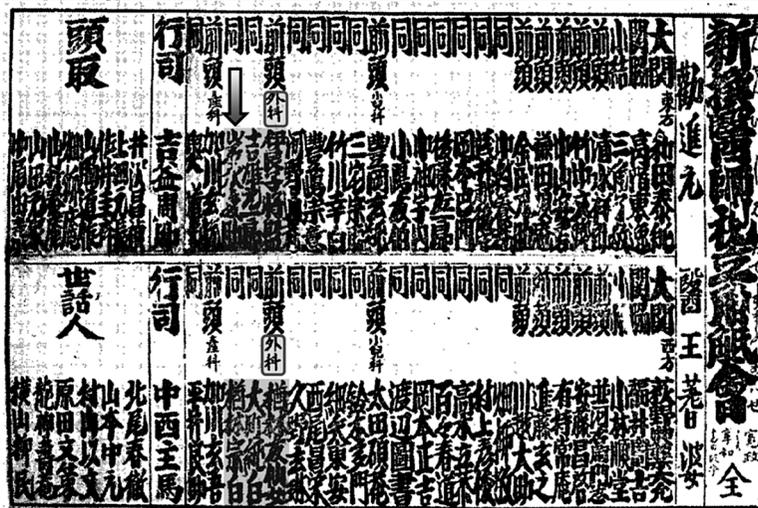
ら筆記する所の随筆雜記数百冊。今尚其の家に蔵せりと云ふ⁴⁵⁾と記され、本業の外科医のかたわら茶の湯や能・俳諧・連歌を嗜む風雅を好んだ文人でもあり、大坂では木村兼葭堂と並ぶ博学者であった。

「鐘奇齋日々雜記」は文楨が天保13(1842)年から亡くなる直前の慶應2(1866)年まで24年間にわたり書き続けた私的な備忘日誌で、藤本篤校注の書が「日本都市生活史料集成1巻三都篇」に収載される。

7) 岩永文卿(1836-1903)

文卿は文楨の長男で、法名は「正徳院義房棟齋居士^{ていさい}」。明治三十六(1903)年二月十三日に68歳で没し長柄共同墓所に葬られた。代々外科医を継承した玄昌の家系は文卿の代で途絶えた。文卿の長男文房(名が栗齋、通称真太郎)は明治三十一(1898)年十二月十二日に十八歳で早世している。

また『浪華名家墓所記』には、文卿の後には「嗣子文房栗齋夭逝し、今は二女の実子其家を継ぎて現存し代々の家号玄昌堂を襲へり」と記される。この文卿の二女は法雲寺過去帳にある法名「誠節院貞室妙操大姉」、大正十三(1924)年四月廿五



『京都の医学史』資料編

図 12 寛政末～享和初（1800）年頃「新撰醫師視立角力会」

がいるが、見山は菅原道真公をお祀りした北野天満宮の祀官の子息で、医家ではなく年代も異なる。菅原姓の医家は左門と猊徳（貞吉）しかいない。

青洲が京都に遊学し岩永氏に師事したのは1782～1785年頃で、文政5（1822）年版の「平安人物志」に名が載る岩永貞吉とは凡そ40年の隔りがある。したがって筆者は青洲の京都遊学時代の師は岩永左門ではないかと考えた。また、京都の岩永氏は当時京都で有名な外科医であった左門と息子貞吉の一家を指すと解釈した方が良いと思われた。しかしこの二人について私が渉猟した限り、生没年や菩提寺・墓などについて全く手掛かりがないため、今なお謎はバールに包まれたままである。

ただ『日本医譜』の「岩永蕃玄」の条に「京師岩永氏同族也」とあることから、大坂と京都の岩永氏は血族ではあるが、浪華の岩永家の史料からは新たな情報は得られなかった。

11. 岩永一族の先祖と思われる 長崎の岩永宗故（1634-1705）について

岩永宗故⁵⁴は『長崎先民伝注解』に「岩永知新、字ハ宗故、何求齋ト号ス。肥前唐津ノ人。少シテ崎ニ来タリ。向井元升^{55,56}ノ門ニ遊ブ。医ヲ学ビ旁ネク通ジ、郷先生ヲ以テ諸生ヲ教授シ、門風良

ヤ盛シナリ。弟子中名世ナル者、重定⁵⁷・玄岱⁵⁸等数人有ル也。知新晩年家富ム。其ノ故業ヲ棄テ毎ニ山水ノ間ニ遊ビ楽シミト為ス。又茶ヲ嗜ム。独リ清福ヲ擲ニシ、細故ヲ讓ラズ。豪逸ニ終ハル」とあり、宗故は若い頃向井元升（1609-1677）に学び、当時（17世紀後半）長崎では有名な医者、儒学者で教育者としても尊敬され、また晩年は医を廃業し自然を愛し茶を嗜む文化人であった。宗故の門人には鶴田重定（生没年未詳）と深見（高）玄岱（1649-1722）のほか貞方之休（如水、1632-1689）⁵⁹や盧草硯（1657-1698）⁵²参照らの有名な儒学者や医師がいる。

延宝二（1674）年7月〔宗故41歳の時〕出島蘭館医テン・ライネ（Willem ten Rhijne, 1649-1700）が来日し、11月17日に長崎の医師四人がオランダ人の用を務めるために派遣されたが、その一人が岩永宗故であったという^{60,61}。宗故は医術に関する160の問い掛けを行い、その返答をまとめて『阿蘭陀薬方雑聚』⁶²を著した。

また元禄八（1695）年〔宗故62歳の時〕堺の豪商隠岐宗南⁶³が長崎に滞在した際、宗南自身が千家の茶の湯の基本的な所作と事柄をまとめて書いた『茶湯秘書』（現在長崎歴史文化博物館に所蔵される）を、宗故は宗南の許可を得て筆写している⁶⁴。

当時阿蘭陀外科を学んだ長崎の医家で岩永姓の人物は名医の誉れ高い宗故のほかにはなく、宗故が岩永一族の先祖と考えられた。

12. 最後に

現在浪華の蕃玄家は途絶え、史料は残っていない。また玄昌家の史料も昭和20(1945)年の大阪大空襲で烏有に帰したようである。そのため、筆者は幸い戦火を免れた岩永蕃玄家と玄昌家の過去帳の実地調査を行い、両家の系譜を明らかにし、

岩永一族の系図を作成した(図13)。そして、青洲の父直道の師は松木の報告どおり、大阪の二世蕃玄岩永寿跡であることを再確認した。

また、青洲の瘍科の師は京都の岩永左門と推測したが、息子の貞吉も当時京都で名を馳せた外科医であり、京都の岩永氏は左門とその子貞吉一家の意味であると思われた。京都の岩永氏については史料が乏しく確定には至らなかったが、今後の解明が望まれる。

さらに岩永一族の先祖は、長崎の地で向井元升

【先祖】 岩永宗故 知新

*1705年4月1日
72歳没

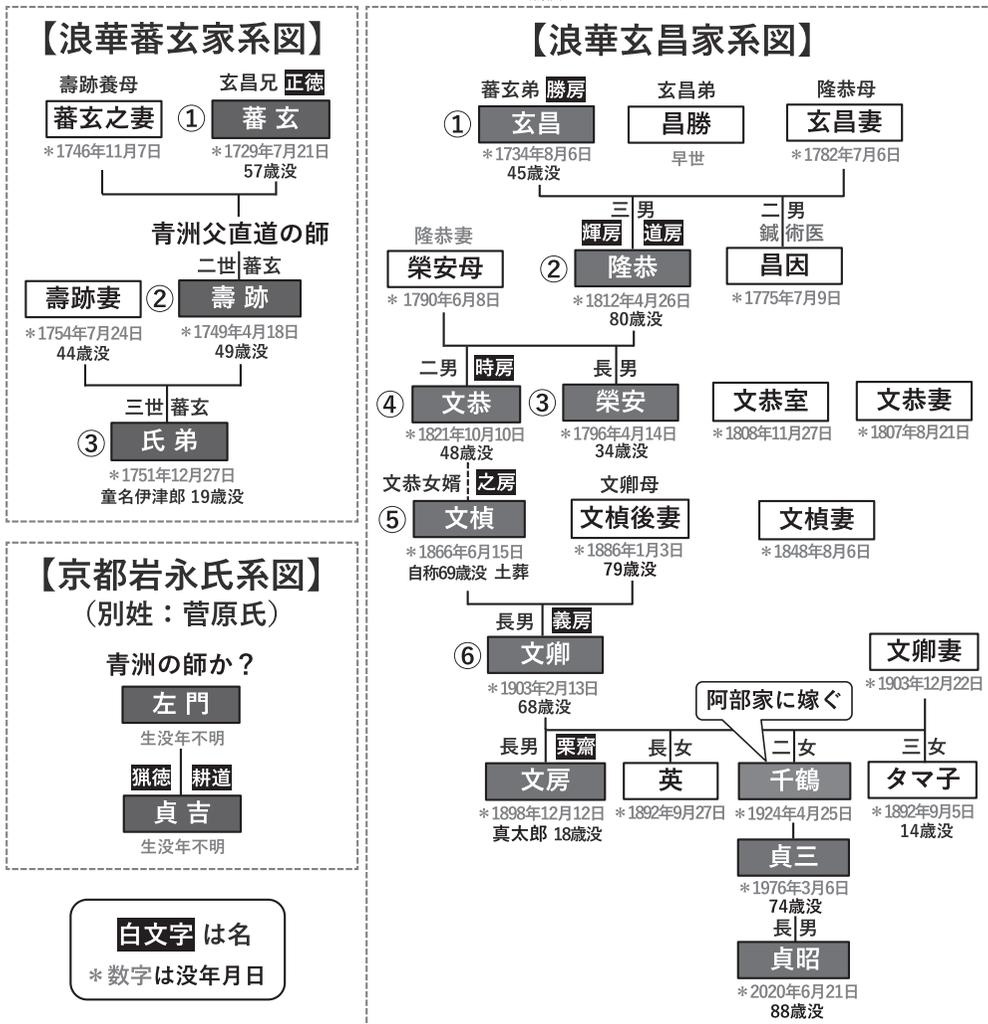


図13 岩永一族の系図

に学び、医者、儒学者として多くの人物を教育し、晩年は茶などを嗜む文化人であった岩永宗故であると思われた。

長崎から京阪に渉り阿蘭陀外科を広めた岩永一族の功績は、もっと広く認知されてもよいと思ひ筆を執った。稿を終えるにあたり、過去帳の閲覧及び開示を快諾していただいた法雲寺住職杉山宗玄師と故岩永貞昭氏の長女桂子様、ならびに近年他界された浄光寺先代住職中村善等師のご内室光子様とご息女鈴木あゆ子様にご心より御礼申し上げます。

本稿の要旨は、令和4（2022）年5月に開催された第123回日本医史学会学術大会（松山）で発表されたものである。

注釈と参考文献

- 1) 呉秀三. 華岡青洲先生及其外科. 東京：吐鳳堂；1923.
- 2) 宗田一. 洋学史から見た華岡青洲. 洋学3—洋学史学会研究年報. 東京. 八坂書房；1995: p. 11-27
- 3) 松木明知. 中川修亭の「麻薬考」の書誌学的研究—四種の写本の検討—. 日本医史学雑誌 1999；45(4): 585-599
- 4) 宗田一. 華岡青洲の麻酔薬（通仙散）をめぐる諸問題. 呉秀三 華岡青洲先生及其外科覆刻版附録. 京都：思文閣出版；1971. p. 23-35
この附録のp. 1-10に宗田一蔵の覆刻版『麻薬考』寛政八年序が、p. 11-22に『外療秘薬考 一名麻薬考』文政九年刊が掲載される。
- 5) 松木明知. 華岡青洲研究の新展開. 東京：真興交易（株）医書出版部；2013. p. 99
- 6) 前掲（5）. p. 39-45. 『華岡先生略傳』の原本複写が掲載される。
- 7) 桃谷華洲（1711-82）、山田静齋（?-1794）は江戸時代中期の儒学者。
- 8) 鈴木蘭園（1741-90）は医学を浅井凶南に学び、書・音律に詳しく儒学や医学を学ぶものが多く集まった。
- 9) 朝倉荆山（1755-1818）は淀藩儒者。名は璞，字は琢卿，通称を支蕃と云った。青洲とは特に親しく、青洲が京都での遊学を終えて帰郷する際、荆山が青洲に贈った「送序」が『禁方拾録』にある。

「紀州花岡伯行。遊學于京師，就予驩有年矣。其人質直勇毅好學，精力兼人。夫伯行世醫者，蓋其遠遊也。欲益修其伎，兼涉學術，以大振世業也。（以後略）」（原漢文）。「紀州の花岡青洲は京都に遊学し、予に就いて喜び年月が経過した。その人は正直で強い意志を持ち学問を好み精力的であった。そもそも世間の医者

としてまさしく故郷を離れ遠く遊学した。益々その医術を修得せんと欲し、以前から學術にあちこち転々とするので、先祖代々から受け継いできた仕事を成し遂げようとした」（口語訳は筆者）と、青洲について荆山は語っている。

また、松木は送序にある青洲の言に「苟既為醫乎。不可不焦神極能于治疾之道焉。我願治人之所不能治者」（原漢文）。「苟も、既に医為るや、疾を治す道に神を焦がし、能を極めざる可からず。我、人の治すこと能わざる所の者を治するを願う」（第119回医史学会抄録「華岡青洲の医哲学に及ぼした吉益東洞の影響」）と、青洲の決意として「活物窮理」の箴言が記されていると述べている。

- 10) 閩洛ノ道は、洛閩の学問のこと。中国宋代の儒学者程頤と程頤の二兄弟と朱熹の唱えた学説の意で朱子学を指して云う。
 - 11) 吉益南涯（1750-1813）は吉益東洞の長男で、天明の京の大火で大坂に移り、43歳のとき再び京都に帰り、父の万病一毒説を修正して気血水説を唱えた。著作には『傷寒論精義』『医範』などがある。
 - 12) 大和見立（1749-1827）は伊良子道牛（1672-1734）門下の大和見水の養子で、のちに見水を襲名した（二代）。三代見水は、青洲の門人姓名録に「和泉 天保3年岸和田家中 大和見水」と名が載る。
 - 13) 中川故・壺山。麻薬考。京都大学附属図書館富士川文庫。1796序。請求記号：マ/51
 - 14) 中川修亭（1771-1850）は京都の生まれ。名は故，定故。字は其徳。通称は周貞。号が修亭，壺山，抱神堂主人。吉益南涯の高弟で古方の大家で後世方にも通じ、青洲の友人で外科蘭方にも通じた名医である。天明8（1788）年正月の京都の大火で罹災し、旧友を頼り紀州那賀郡平山村の青洲の処で数年過ごした。修亭の著『女科筌蹄』下巻の「児枕痛治法」に「予成童ノ比花岡伯行京ニ出テ勤学セリ。数々会シテ医事ヲ談ジタル」と述べているように、修亭は京都遊学中の青洲とは旧知の仲（朋友）であった。青洲は11歳年下の修亭をとりわけ可愛がり研究の助手をさせた。修亭は寛政3（1791）年に青洲の著『禁方録』の凡例を書き、その後京都へ帰り寛政5（1793）年に吉益南涯に入門。文化3（1806）年に海上随陽が京都で蘭学塾を開くと、早速入門して蘭学を学んだ。
- なぜか修亭は京都・大阪でよく居処を変えている。はじめ京都に住んだが、文政の頃から大阪に移り、島之内、上町、安土町、瓦町、難波橋西と5回も転居している。また『整骨新書』跋には「文化己巳（1809）年平安 中川故・其徳撰」とあるので京都で撰し、『平安人物志』文化10（1813）年版と文政5（1822）年版には「御幸町姉小路北」とあるので、この頃まで京都に居住していたことが分かる。その後「大坂医師見立番付」に文政3（1820）年から嘉永2（1849）年頃まで「役付」に名前が挙がっているため大阪に移ったと

- 思われる。古希を迎え難波村の別荘澄霞軒に隠居し、尚齒會を催し多くの知友を招いた。嘉永3(1850)年2月6日80歳で没した。
- 15) 花井仙蔵(大塚敬節の考証に拠れば1778-82年没)は服部南郭に徂徠学を学んだ安芸出身の儒医斎静斎(1729-1778)の門人で、静斎の傷寒論の講説を聴き「微辞辨」を著述した。
- 中川修亭は斎静斎について『医方新古弁』附録の「総説」で次のように語っている。
- 「斎静斎ハ傷寒論ヲ尊重スルコト天民先生ニ濫觴スト雖モ、其ノ沙石ヲ淘汰シテ其ノ真ヲ擇ビトリ、以テ古ノ正文ニ復セントスルハ静斎ナリ。此ノ人モト芸州ノ人ニテ甚ダ秀才ナリ。モトハ南郭ニ学ビテ泉州ニ遊ビテ久シク書ヲ読ミ後ニ京師ニ止マレリ。文辞ニ於テ一家ニシテ甚ダ文脈ヲ見ルニ長セリ。此ノ人甚ダグレタル眼力ヲ以テ傷寒論ヲ読ミシ故ニ始テコレヲ見ダシタリ。(中略)古時ノ正文ヲ擇ビ出セルハ静斎ニテ定マレリ。此ノ人東洞翁ト甚ダ親シク交ワレリ。故ニ静斎モ医事ノ骨髓ヲ東洞翁ニ聴ケルカ未知ナリ。不 然 仲景ノ書ヲカクモ精密ニ見出スコトハ出来マジキ。東洞翁モ其ノ頃名儒ニ交ワルコト多カレドモ唯独リ静斎ヲ貴ビ、其ノ子ヲ從学セシム。静斎ヨク傷寒論ヲ見出セルヲ以テ、嘗テ諸子弟ノタメニ此ノ書ヲ講ゼルコトアリ。其ノ説ヲ受ケン人多カレドモ、著述セシハ花井氏ノ「微辞辨」泉氏ノ「劉氏傳」浅野氏ノ「特解」等ナリ。「微辞辨」ハ記聞ノママナリヤ。其ノ文頗ダ碎 ナリ。花井仙蔵没後門人大西氏(大西晴信)之ヲ上木セリ。
- 16) 森約之(1835-71)は通称が養真、森枳園(名が立之、1807-85)の長男で、父に似て有能で将来が期待され福山藩校誠之館の教官となったが、明治4年37歳の若さで父に先立ち夭逝した。
- 17) 松木明知。新出の中川修亭編「麻薬考」写本三本の書誌学的検討―「麻沸考」の成立と七種の写本の系統―。日本医史学雑誌2017;63(1):65-66
- 松木は、“富士川本系統の「麻薬考」は修亭の収集した処方14方を取めた前半と岩田敏功が収集した6方を取めた後半からなる”としている。
- 18) 前掲(3)。590-593
- 松木は“富士川本には「以上中川氏所集 以下巖切附」、宗田本には「以上中川氏所集 以下巖切(功)附」(p.592の「(第三表)各写本の処方の比較(二)」には「以下巖切附」と記載)があるが、この記述は武田本、松木本になく、この記述のみによっても富士川本と宗田本が同じ系統に属す”と述べている。
- 19) 岩田三谷(生没年不詳)は本姓大江氏。名は広彦。通称一二三。号が三谷。紀州の人で、吉益南涯に医学を学び、大坂で開業。文政8(1825)年に南涯の著『医範』を校正し出版した。その他「医道二千年眼目篇自一卷至三卷評」「西説医事弁」「陰陽与神経同弁」などの著作がある。
- 20) 中野操。大坂医師番付集成。京都:思文閣出版;1945。
- 21) 華佗(生没年不詳)は中国後漢末の伝説の名医。字が元化。
- 22) 前掲(3)。589。
- 松木は“「往歳紅夷人好傳麻薬」の「好」は宗田本、松木本にあるように「始」が正しい”としている。
- 23) 吉雄元吉(生没年不詳)は号が紫溟、別名王貞美。出島蘭館医に学び、寛政12(1800)年京都室町二条南に蘭学塾・蓼莪堂を開き多くの塾生を指導した。
- 24) 花岡青洲(震)著。『春林軒禁方録』7巻。京都大学附属図書館富士川文庫。請求記号:シ/114。
- 25) 松木明知。華岡青洲の撰による「統禁方録」に関する研究。日本医史学雑誌2018;64(3):283
- 松木は“京大富士川文庫本「春林軒禁方録」は題名が「春林軒禁方録」であるが、内容は「統禁方録」1834年山田脩敬書写。廣田泌の序を欠くものである”としている。
- 26) 前掲(25)。293
- 松木は“「美爾煎」(ピリ煎)の「ピリ」は「曼駄羅花」を意味するオランダ語 *bilsen* (*kruid*) の前半を音写したもので、この処方オランダ系統のものであることを示している”と述べている。
- 27) 中川壺山(修亭)。女科筌蹄二巻。京都大学附属図書館富士川文庫。1826。33。請求記号:シ/186
- 28) 永富独嘯庵。漫游雜記。早稲田大学図書館。1764。21。請求記号:ヤ09 00347
- 「乳癌ノ治セザルコト古ヨリ然リ。而レドモ紅毛書中ニ言有リ。曰ク。ソノ初発、梅核ノ如クナルノ時、快刀ヲ以テ之ヲ割キ、後金瘡ノ法ニ從テ之ヲ治スト。斯ノ言味ワヒアリ。余未ダ之ヲ試ミズト雖モ、書シテ以テ後人ニ告グ」と記され、華岡青洲の麻沸散による乳房離断術(1804年)の約40年前に、独嘯庵は外科手術が有効であることを説いている。
- 29) 前掲(1)。p.27-28
- 30) 伊良子光顯(1737-99)は江戸時代中期の蘭方外科医。名は主膳、祖父道牛が始めた「伊良子流外科」を継ぎ、『外科訓蒙圖彙』を著した。宝暦8(1758)年22歳の時、山脇東洋・栗山孝庵について日本で3番目の腑分けを行った。
- 31) 『外科訓蒙圖彙』は蘭語訳されたフランス人医師アンブローズ・パレ(Ambroise Paré, 1510-1590)の外科書を伊良子光顯が訳した書で、大小腸の区別はついているが、尿が小腸から出るとする五臓六腑説は脱していない。
- 32) カスバル・シャムベルゲル(Caspar Schamberger, 1623-1706)はドイツ人出島蘭館外科医。1649年から1651年に日本に滞在し、阿蘭陀外科の流派「カスバル流外科」を創始した。
- 33) 宇津木昆台。日本医家伝記辞典「日本医譜」。東京:たにぐち書店;2018。p.352

- 34) 西区史 第三巻. 大阪：西区役所；1943. p.483
- 35) 前掲 (5). p.103
松木は浄光寺住職中村善等師に過去簿の調査を依頼し，“華岡直道が外科を学んだのは、二代「寿跡」(1701-1749)であったことが明らかになった”と記している。
- 36) 中野操. 大坂医師番付集成. 京都：思文閣出版；1945.
- 37) 前掲 (33). p.356-357
- 38) 前掲 (34). p.483
- 39) 宮武外骨. 浪華名家墓所記. 大阪市：雅俗文庫；1911. p.8-9
このページに、岩永盤玄、玄昌、昌因、隆恭、榮安、文恭、文楨、文卿の解説がある。宮武外骨(1867-1955)は、反骨反権力を貫いた風刺ジャーナリストで、発布直後の明治憲法を揶揄し不敬罪で入獄した。「大正の奇人」と呼ばれても嫌がるどころか、むしろ誇りにすら感じていたという。
この書は暁 晴の手書きの稿本に後人が補足したものである。書肆の火災で暁 晴の原本は烏有に帰したが、その謄本を所有していた京都の富岡鉄斎から外骨が拝借し再写して刊行したものである。
- 40) 岩永輝房隆恭. 阿蘭陀流系譜. 慶應義塾大学図書館；1759.
- 41) ヴォルフガング・ミヒェル. 十七世紀の平戸・出島蘭館の医薬関係者について. 日本医史学雑誌 1995；41(3): 403-420
「出島商館日誌」に Daniel Busch は、1662.11.6-1665.10.27 に医師として来日し、1655 年(1665 年の誤り)1 月 21 日、ブッシュは平戸侯により長崎に勉強のため派遣されていた嵐山甫安に証明書を発行したと記される。
- 42) 岩永道房. 阿蘭陀新伝植林先生正流外科法八巻(首巻, 仕掛陰集第 1, 第 1 の 2, 木集, 土集, 金集, 水集). 慶應義塾大学図書館
「仕掛陰集第 1」の冒頭に「末弟得龍子岩永道房甫謹写」“榮休先生曰夫阿蘭陀外科之術往昔先傳授勤行之似難得於其妙恐不定主意謂坎因弔今舉其為綱領者一二以示門子夫其依之宜入室”と記している。また「水集第七」には“此ノ書中ニ出ス諸方ハ師家先々ヨリ口授面命シテ後各自ニ潜カニ記シ置ク者ナリ。蓋シ其傳數々スルトキハ相共ニ其真ヲ失ワンコトヲ恐ル故ニ是ヲ筆記シ又当流諸説ノ内ヨリ用藥之例並ニ効驗等ヲ撰出シテ之ヲ補フ”と、この書は植林流外科を口授面命した秘伝の書であるとしている。
- 43) 石田誠太郎. 大阪人物誌 卷一. 大阪：石田文庫；1927. p.23
大阪毎日新聞社長本山彦一氏の序、題字は大阪朝日新聞社長村山龍平氏の筆。
大阪の地ならびに近郊において出生、住居、物故した人物で浪華の文化事業に貢献した千二百余人の小便を蒐集し、全五冊からなる。
- 44) 華岡鹿城(1779-1827)は青洲の末弟で、文化 13(1816)年に大阪中之島で「春林軒」の分塾である「合水堂」を開き、「華岡流外科」を教授し多くの門弟を育成した。
- 45) 前掲 (43). p.24
- 46) 岩永貞昭先生が歩んでこられた道「わが国の蛋白質科学研究発展の歴史」第五回. 日本蛋白質科学会 2012：33-39
- 47) 宮田敏行. 岩永貞昭先生を悼む. 血栓止血誌 2020；31(6): 636-637
- 48) 前掲 (33). p.352-353
- 49) 弄翰子. 平安人物志. 国際日本文化研究センター；1852. p.281
『平安人物志』は近世京都の名士録で市井の各方面の文化人を集成している。明和 5(1768)年の第 1 版にはじまり、安永 4(1775)年、天明 2(1783)年、文化 10(1813)年、文政 5(1822)年、文政 13(1830)年、天保 9(1838)年、嘉永 5(1852)年、慶應 3(1867)年の第 9 版まで、およそ 10 年おきに増補改訂された。
- 50) 京都府医師会. 京都の医学史 資料篇. 京都：思文閣出版；1980. p.547
寛政末・享和初(1800 年頃)に板行された「医師番付」で、東の大関に和田泰純(東郭, 1743-1803)、西の大関に荻野典 薬 大 允(元凱, 1737-1806)が挙がる。この二人は医術・学問・世評などで甲乙つけがたく、死後とはともに洛東の鳥辺山に葬られた。「和田荻野死んでも角力鳥辺山西と東の関と石塔(関は大関のこと)という落首がつくられた。(中野 操)
- 51) 伊良子将監は、『平安人物志』の文化 10(1813)年版と文政 5(1822)年版の「医家」に伊元明(字子玉、号西高)で名が挙り、伊良子道牛と孫・光顕の子孫と考えられている。また文政 5 年版には、王貞美で吉雄元吉の名もある。(図 11) 参照。
- 52) 若木太一・高橋昌彦・川平敏文. 長崎先民伝注解—近世長崎の文苑と学芸—。東京：勉誠出版；2016。
『長崎先民伝注解』は唐通事であった盧草拙(1647-1688)の草稿を子の千里が文政二(1819)年に加筆・修正し板行した『長崎先民伝』の注解書である。『長崎先民伝』には近世前期に長崎の地に生きた学者・僧侶・市井の人々や来遊した中央の学者・文人たち 147 名の伝記が収められている。
- 【盧氏の系譜】
初代；君玉(?-1631)は慶長 17(1612)年に福建省延平府から長崎に渡来した。
二代；庄三衛門(1622-86)は、君玉の男。
三代；草硯(1647-88)は、小沢敏夫著『長崎年表』第一巻. 1935. p.47. 元禄 11(1698)年「盧草硯没ス」の条に「名ハ玄琢. 幼ニシテ岩永宗故ニ從ヒ字ヲ学ビ書ヲ読ム. 後小林謙貞ニ從テ天文運氣ノ学ヲ修ム. 又医ヲ小野昌硯ニ学ビ、又京ニ入テ桂宗叔ノ門ニ

遊ブ。良医ヲ以テ称セラル」と書かれ、幼い頃岩永宗故に読み書きを教わっている。

四代；草拙(1675-1729)は、草硯の男で長崎聖堂の学頭となり書物改め役を命じられた。江戸に赴き西川如見とともに天文御用を勤め、八代将軍吉宗の洋学撰取に影響を与え、また『長崎先民伝』を著した。

五代；千里(1707-55)は、栗崎流外科の始祖・栗崎道意(1724-93)の男で草拙の娘婿となる。草拙の遺志を継いで『長崎先民伝』をまとめた。

53) 前掲(52). p.132

菅原見山は「京畿の人。父は北野松梅院*¹、母は細川幽齋*²の女孫也。見山、天資高邁、材氣拔群。文を好み、書を工みにす。元和元年、長崎に卒す」とあり、見山は北野天満宮の祀官の息子で文人である。長崎で元和元(1615)年に没した。

*¹ 北野松梅院は北野天満宮の三院家の一つ。

*² 細川幽齋(1534-1610)は足利義輝・義昭の2人の室町将軍に支え、信長・秀吉・家康の3人の天下人からも信任され、また当代屈指の文化人で歌人としても有名で細川家の祖となった。

54) 前掲(52). p.147

55) 前掲(52). p.130

「向井元升(1609-77)、字は以順。肥前佐賀の人。慶長癸丑(1613)、年五歳、父兼秀に随て崎に来て寓す。稍や長じ林先生(林吉左衛門)に依て天文学を伝ふ。儒医を以て名あり。万治元(1658)年、移りて京師に業をなす。延宝五(1677)年卒す。年六十九。著す所『乾坤弁説』、世に行はる」とある。

56) ヴォルフガング・ミヒェル。初期紅毛流外科と儒医向井元升について；日本医史学雑誌 2010；56(3): 367-385

「元升は寛永16(1639)年から書物改役として、唐船が持ち込む書物を「御文庫」(紅葉山文庫)に納める職務をつとめ、その後正保4(1656)年に興善町に建設された聖堂・孔子廟の祭主となり、翌年私塾・輔仁堂を開いて儒学を講じた。明暦2(1656)年に沢野忠庵(Cristovão Ferreira)がローマ字で作成した原稿を、通詞西玄甫を介して「乾坤弁説」として写し和文に仕上げることになり、西洋天文学の受容史に残る偉大な業績を挙げた。また、明暦2(1656)年大目付井上筑後守政重の依頼で阿蘭陀通詞を介して出島蘭館医アンス・ヨレアン・ハンケ(Hans Juriaen Hancke)と接触し、西洋外科術に関する報告をまとめた。さらに翌年11月に就任したハンケの後任者ステフェン(Steven de la Tombe)からも医術の教授を受けた。「阿蘭陀外科医方」の成立は明暦3(1657)年10月の時期である」としている。その後明暦4(1658)年11月に京都で医を開業し、寛文11(1671)年加賀藩主前田綱紀の依頼により『庖厨備用倭名本草』を著した。子は儒医の長男元端(1649-1712)、俳人の次男去来(1651-1704)、儒学者の三男元成(1656-1727)がいる。

57) 前掲(52). p.70-71

鶴田重定(生没年未詳)は、字は閑逸。通称重之。漢学者。幼くして業を岩永宗故の門に受く。水戸光圀侯や朱舜水を礼聘し尊して師と為し、京で伊藤仁斎に経学を学ぶ。長崎に帰り、客を謝絶し閉戸して書を読む。陽明学を好んだ。

58) 前掲(52). p.25-27

深見(高)玄岱(1649-1722)は、江戸時代前期-中期の儒者、書家。慶安2年2月15日生まれ高大誦の子。先祖は明の福建省出身で、父の代より長崎に住み深見氏を名のった。村の岩永知新に、その後独立性强易に学び儒学、書、医学に通じ、新井白石の推挙で幕府儒官となった。享保7年8月8日死去。74歳。字は子新、斗膽。

59) 前掲(52). p.34-36

「貞方之休、人と為り人の短を責めず、己が長を炫らはず。親族に事へて謹、朋友に交はつて信、算術に精し。頗る学を好み、岩永生(名は知新)に師事す(以後略)」とあり、漢学者である。先祖は松浦藩士。

60) 酒井シヅ、小川鼎三。『解体新書』出版以前の西洋

医学の受容。日本學士院紀要。1978；35(3):136-138

『阿蘭陀薬方雜聚』の巻末に「右ハ岩永宗故問掛阿蘭陀医師返答、通詞和ヶ書記者也。延宝二年寅年阿蘭陀通詞中山作左エ門同中島清左エ門同名村八左エ門同榎林新右エ門同横山與三右エ門同富永市郎兵衛同本木庄太夫同加福吉左エ門」と記され、延宝二(1674)年宗故の問い掛けに阿蘭陀医師(テン・ライネ)が返答し、それを阿蘭陀通詞8名が訳したことが分かる。

61) 岩生成一。オランダ史料から見た江戸時代初期西洋医学の発達。日本學士院紀要。1968；26(3):168-169

オランダ商館日記1674年9月25日の条によれば「奉行は我等の許へ日本人医師並に町役人二名を派して、この四人は皆我等の外科医について医術を修得させるように命じたので、船の出帆後これを始めることを約したが、併し外科医殿が斯様な事に余り煩はされんことを望む」とあり、さらに1678年6月24日の条に「最も主なる長崎の医者四人が、オランダ人の用を勤めるために来た。二人は上席であり、二人は次席であつて、その名は稲永宗古(Inanaga Soco)、池辺適庵(Ikebe Thekian)、柳洋沢(Yannagy Yotac)および野田順安(Noda Jyunnan)の四人で、幕府から凡そ一年銀二〇〇両の手当てを支給される」とあり、上席の稲永宗古が『阿蘭陀薬方雜聚』を筆記した岩永宗故であると思われる。

62) 岩永宗故。阿蘭陀薬方雜聚(繕生室医話 第2冊)。

京都大学附属図書館富士川文庫。1851。請求記号：セ184。

63) 堺市史 第七巻。大阪：堺市役所；1930。p.358-359

隠岐宗南(?-1713)は号が潜斎、名は宗物、通称与左衛門で、屋号が駿河屋である。堺の人で北本郷の総

年寄役を勤めた。はじめ表千家の四代江岑宗左こうしんそうさ（1613–1672）の門に入り、後に五代良休宗左りょうきゅうそうさ（1650–1691）に隸して茶湯を究め、堺阪および諸国に其の門弟頗る多かった。代々富豪を以て聞こえ、また古代の名器・織物の鑑別に長じた。

64) 鈴木康子, 一七世紀長崎における茶の湯—『日葡辞書』と『茶湯秘書』を中心として—, 花園大学文学

部研究紀要, 2019: 111

『茶湯秘書』の文末には「撰北懿潜齋隠岐宗沕誌 右雖家藏之書依懇望令免写畢致勿妄漏矣 元禄八乙亥穩季秋上浣懿潜齋宗沕誌 岩永宗故翁先生」とあり、この書の著者は隠岐宗沕で、岩永宗故が筆写したと記されている。

The Mystery of the Iwanagas, the Surgeon Family That Taught Seishu Hanaoka and His Father Naomichi

Shu IMAI

Imai Orthopedic Surgery

Seishu Hanaoka studied surgery under Dr. Iwanaga in Kyoto, while his father Naomichi did so under Bangen Iwanaga in Osaka. Bangen and his younger brother Gensho Iwanaga came Nagasaki to Osaka in the middle of the Edo period. Although the Iwanagas in Osaka and Kyoto were known as a surgeon family that had adopted Western medicine, the so-called “Oranda-Geka” in the Edo period, the family record was unclear. Therefore, I consulted the obituary records of both-Bangen’s and Gensho’s families in Osaka and clarified the genealogy. I was able to confirm that one of Bangen’s children had taught Naomichi. Furthermore, I researched the “*Oranda-Ryu Keifu*”, written by Ryukyo, Gensho’s third son and found that the Iwanagas trained at the Narabayashi school taught by the Dutch surgeon Daniel Busch. Even though I presumed that the Dr. Iwanaga in Kyoto was either Samon or Sadakichi who had been known as a skillful surgeon in Kyoto, this mystery has not been solved. The ancestry of the Iwanaga clan is unclear, and it is also possible that he was Soko Iwanaga, who studied under Gensho Mukai in Nagasaki. These are my thoughts.

Key words: Seishu Hanaoka, Bangen Iwanaga, Gensho Iwanaga, Soko Iwanaga, Oranda-Geka